

「多施設多職種緩和ケアテレビカンファレンス」における がん看護専門看護師の果たす役割

中村 喜美子¹⁾, 村木 明美²⁾, 大市 三鈴³⁾
辻川 真弓⁴⁾, 大西 和子¹⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 看護学部

2) 済生会松阪総合病院

3) 伊勢赤十字病院

4) 三重大学大学院 医学系研究科 看護学専攻

研究報告

「多施設多職種緩和ケアテレビカンファレンス」における がん看護専門看護師の果たす役割

中村 喜美子¹⁾, 村木 明美²⁾, 大市 三鈴³⁾
辻川 真弓⁴⁾, 大西 和子¹⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 看護学部

2) 済生会松阪総合病院

3) 伊勢赤十字病院

4) 三重大学大学院 医学系研究科 看護学専攻

キーワード： 緩和ケア, 多職種カンファレンス, チーム医療, 専門看護師, 役割

要 旨

施設を超えて互いに活用し合えるシステムとして、2012年12月に多施設多職種緩和ケアテレビカンファレンス（以下、テレビカンファレンス）を立ち上げた。テレビカンファレンスにおいて、その原動力であるがん専門看護師（以下、OCNS）がどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的に、OCNSに調査を行った。対象者は7名で、テレビカンファレンスで果たしている役割、今後果たしたいと考えている役割についてフォーカス・グループインタビューを行った。データをコード化し、意味内容の類似性に着目してカテゴリー化した。その結果、【参加者の成長を促す役割】【テレビカンファレンスの有効性を高める役割】【現状からさらに発展させていく役割】の3つのコアカテゴリーが抽出された。これらの役割を果たすなかで、OCNSは、俯瞰的視点をもってテレビカンファレンスを機能させ、多職種で話し合うことの有効性を引き出していた。また、変化促進者としてリーダーシップを発揮し、さらなる発展と拡がりの構想をもってテレビカンファレンスをより良いものへと変化させようとしていた。OCNSがこれらの役割を果たすことで、緩和ケアに不可欠の多職種カンファレンスはより充実し、結果的に緩和ケアの質向上に貢献できることが示唆された。

I. はじめに

高度化・専門分化がすすむ医療の中で、日本看護協会は看護の質向上を目指して1996年に専門看護師資格認定制度を開始した。約20年が経過した現在、専門看護師（Certified Nurse Specialist：以下、CNS）の認定者数は、13分野1883名となっている。中でもがん看護専門看護師（Oncology Certified Nurse Specialist：以下、OCNS）は713名と大幅に増えており¹⁾、その背景には、2006年に成立したがん対策基本法に基づくがん医療の充実への国の取り組みによる影響が考えられる。

がんは、日本では1981年から死因の第1位となり、国民の生命と健康にとって重大な問題をもたらしている。このような状況の中、国をあげてのがん対策が急務となり、2006年にがん対策基本法が成立した。2007年に策定されたがん対策基本計画では、「治療の初期段階からの緩和ケアの実施」が、また2012年の第2期がん対策基本計画では「がんと診断された時からの緩和ケアの推進」が重点的に取り組むべき課題として明文化された。そして、がん医療の均てん化の一環として、がん診療連携拠点病院を中心に医療機関の整備が進められてきている²⁾。

このような国の取り組みに応じて各都道府県でも緩和ケアの実施が推進され、特にがん診療連携拠点病院では、その指定要件として緩和ケアチームの設置が求められた³⁾ことから、緩和ケアチーム活動を充実させ、質の高い緩和ケアの提供を目指してきた。

筆者らが行った三重県内の看護師対象の調査⁴⁾では、緩和ケアは5箇所のがん診療連携拠点病院だけでなく地域の病院にも普及していた。しかし、緩和ケアに関わる看護師は、知識技術の未熟さなど個人レベルの問題から人員配置や職種の未充足など組織レベルの問題まで、多岐にわたる問題を抱えていた。また、施設によっては相談できるスタッフがいなかったことから、緩和ケアに携わるOCNSや緩和ケアチームからの支援を求めていることが明らかになった。このように、個人の未熟さという問題だけでなく、緩和ケアチームの充足度の違いや、緩和ケアを専門とするリソースの有無、人員の問題など、特にがん診療連携拠点病院とそれ以外の病院とでは、緩和ケア

整備体制に格差がみられていた。

このような背景から、がん診療連携拠点病院の緩和ケアチームや三重県内のOCNSを緩和ケアのリソースと捉え、施設を超えて互いに活用し合えるシステムとして2012年12月に多施設多職種緩和ケアテレビカンファレンス（以下、テレビカンファレンス）を立ち上げた。

テレビカンファレンスは、県内7施設をインターネット回線で結び、毎月1回、18時から約1時間、事例検討を実施している。参加職種は、緩和ケア医師、看護師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー、臨床心理士、大学の教員などで、事例のテーマに応じて各科専門医師や理学療法士、管理栄養士などの参加を依頼している。司会と事例提供は輪番制とし、各施設のOCNSや認定看護師が、司会を担うとともに事例提供の準備や参加者の調整などを行なっている。このカンファレンスを運営していくなかで、OCNSの役割はたいへん大きく、カンファレンスの司会・進行だけでなく、患者・家族に関する情報提供や看護の視点からの考えを述べ、さらに多職種者からの意見をまとめ、全人的ケアを行なうための解決策を検討する核となっている。

テレビカンファレンスを立ち上げて3年余りが経過し、毎月のカンファレンスにおいてその原動力となるOCNSがどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的にOCNSに調査を行った。多職種の中でもリーダーシップを発揮することを求められるOCNS⁵⁾が、自分自身が果たしてきた役割を客観的に認識することで、あるいは新たな役割に気づくことで、今後テレビカンファレンスをより有効に機能させていくことが期待でき、そのことはさらなる質の高い緩和ケアの提供に貢献すると考えるからである。

II. 研究目的

緩和ケア向上に向けたテレビカンファレンスにおけるOCNSの果たす役割を明らかにすることである。

III. 用語の定義

OCNS の役割：テレビカンファレンスにおいて OCNS として期待されている働き、あるいは OCNS が遂行している、もしくは遂行しようとする働きや役目とする。日本看護協会が規定する CNS の 6 つの役割である実践、相談（コンサルテーション）、調整、倫理調整、教育、研究に限らず、OCNS 自身が考える働きや役目を指す。

自施設：テレビカンファレンスの参加者それぞれが所属する病院をさす。

フォーカス・グループインタビュー：ある特定のテーマについて、6～12名のグループで形式ばらずに自由に話し合ってもらいインタビューの方法である。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究

2. 対象者

テレビカンファレンスに参加している施設に所属し、何らかのかたちでテレビカンファレンスに関わっている OCNS で、研究参加への同意の得られた 7 名を対象者とした。

3. データ収集方法

2015 年 12 月に、研究者 3 名が、研究対象者 7 名に対して個室にてフォーカス・グループインタビューを約 1 時間 25 分を行い、対象者の許可を得てインタビュー内容を録音した。インタビューは、テレビカンファレンスで果たしている役割、今後果たしたいと考えている役割について、対象者全員に自由に発言してもらった。

4. 分析方法

録音内容から逐語録を作成して全データとし、テレビ

カンファレンスで OCNS が果たす役割に関する部分を意味内容が損なわれないよう最少単位で抽出し、見出しをつけてコード化した。コードの意味内容の類似性に着目して分類し、抽象度を上げてサブカテゴリー化した。サブカテゴリーの意味内容の類似性に着目して分類し、抽象度を上げてカテゴリー化、さらに抽象度を上げてコアカテゴリー化した。分析の妥当性を確保するために、分析の過程は 3 名の研究者で行い、大学教員である質的研究者のスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

対象者に対して、研究の目的と方法、研究参加は自由意志であること、個人が特定されないよう留意することを説明し、同意を得た。また、フォーカス・グループインタビューを行う際には、個室を準備するとともに、対象者は互いに事前に設定したアルファベットで呼び合うこととし、対象者の個人が特定されないような配慮をした。

本研究は、済生会松阪総合病院の倫理審査において承認を得た。

V. 結果

1. 研究対象者の属性

対象者は 7 名であった。OCNS 認定後の経験年数は、5～10 年が 6 名、5 年未満が 1 名であった。テレビカンファレンスに参加し 3 年以上経過している者が 6 名、1 年未満のものが 1 名であった。また、所属施設は、都道府県がん診療連携拠点病院が 2 名、地域がん診療連携拠点病院が 1 名、県が指定するがん診療連携推進病院が 3 名、それ以外が 1 名であった。

2. テレビカンファレンスにおける OCNS の果たす役割

分析の結果、テレビカンファレンスにおいて OCNS が果たしている役割および今後果たしたい役割は、118 のコード、32 のサブカテゴリー、12 のカテゴリー、3 のコ

アカテゴリーが抽出された。コアカテゴリーを【 】, カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを« » , コードを< > , 対象者の発言を「 」で示す。具体的内容については、表1に提示している(表1)。

1) 【参加者の成長を促す役割】

このコアカテゴリーは、【事例提供者を適切にサポートする役割】【準備から振り返りまで一連の学習を支援する役割】【自施設チームの成長を促す役割】【参加者の意欲向上を図る役割】【参加者のモデルとなる役割】【安心

表1 多施設多職種テレビカンファレンスにおけるOCNSの果たす役割

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
参加者の成長を促す役割	事例提供者を適切にサポートする役割	適切な事例の選択をサポートする
		事例提供に必要な情報を適切に判断する
		事例提供者が検討課題を明確にするのをサポートする
		事例提供者の力量を見極めて事例をまとめるのをサポートする
		事例提供者のサポートを任せてよいメンバーを適切に判断する
	準備から振り返りまで一連の学習を支援する役割	不完全燃焼のまま終わらせないよう配慮する
		準備から振り返りまでを一連のプロセスとしてフォローする
	自施設チームの成長を促す役割	自施設チームを客観的に振り返ることを促す
		チーム力を高められるようリーダーシップを発揮する
	参加者の意欲向上を図る役割	事例提供が学びの体験となるようにサポートする
		事例提供者のモチベーションを上げる
		参加者のモチベーションを上げる
	参加者のモデルとなる役割	参加者の役割モデルとなる
	安心できる場を保障する役割	事例提供者が安心できるように配慮する
		ネガティブな意見を受けた事例提供者をフォローする
		肯定的な雰囲気をつくる
参加者の緊張を和らげる		
テレビカンファレンスの有効性を高める役割	有効なテレビカンファレンスになるように進行をリードする役割	自分自身の司会のスキルを向上させる
		司会を積極的にサポートする
		検討課題からずれないよう意識して発言する
		質問や意見を言うべきタイミングや度合いを調節する
		テレビカンファレンスならではの環境を理解した上でスムーズな進行を担う
	多職種カンファレンスの有効性を引き出す役割	より有効なテレビカンファレンスになるよう考えて動く
		多職種の力が発揮できるよう働きかける
		多職種の特性に配慮する
現状からさらに発展させていく役割	テレビカンファレンスの周知を図り活用を促す役割	参加していない関係者に検討内容をフィードバックする
		テレビカンファレンスの周知に努める
	看護師が相談しやすいシステムを構築する役割	各地域で看護師対象の支援のネットワークを拡げる
		看護師が相談しやすいツールとしてテレビカンファレンスを発展させる
	今後のテレビカンファレンスのあり方を見出していく役割	テレビカンファレンスの目的を現状に沿うよう見直す
		テレビカンファレンスをどう発展させていくかを考える
自施設の役割を果たせるよう動く役割	自施設の役割を自覚し、その役割を果たせるよう動く	

できる場を保障する役割】の6つのカテゴリーから構成された。

(1) 【事例提供者を適切にサポートする役割】

このカテゴリーは、《事例提供者の力量を見極めて事例をまとめるのをサポートする》《事例提供者が検討課題を明確にするのをサポートする》などの5つのサブカテゴリーから構成された。OCNSは、タイムリミットや事例提供者が感じているハードルの高さなどから、見守ったり代わってまとめたりするなど、関与の度合いを決めていた。

(2) 【準備から振り返りまで一連の学習を支援する役割】

このカテゴリーは、《不完全燃焼のまま終わらせないように配慮する》《準備から振り返りまでを一連のプロセスとしてフォローする》の2つのサブカテゴリーから構成された。

OCNSは、検討しきれなかった課題やチームメンバーの不消化な部分をカンファレンス後の話し合いで消化させており、カンファレンス中だけでなく、その前後の学びを大切にしていた。

(3) 【自施設チームの成長を促す役割】

このカテゴリーは、《自施設チームを客観的に振り返ることを促す》《チーム力を高められるようリーダーシップを発揮する》の2つのサブカテゴリーから構成された。「チームがステップアップしていくいいチャンスだと思い活用している」「一緒にピンチも味わいながら、それも一つのチームの進歩にする」など、カンファレンス後の振り返りの時間や事例提供を自施設のチームを成長させていく機会としていた。

(4) 【参加者の意欲向上を図る役割】

このカテゴリーは、《事例提供が学びの体験となるようにサポートする》《参加者のモチベーションを上げる》など3つのサブカテゴリーから構成された。〈多職種に事例提供を呼びかけ、他の施設の同職種の士気を高める〉では、テレビカンファレンス開始当初は、看護師だけが事例提供していたため、「他の職種は看護師の困りごとを検討する、そんな立場になってしまって、モチベーションが下がっているなど感じた。だからこそ、多職種に事例を出してもらおうと意識した」と参加者全体のモチ

ベーションを上げることに配慮していた。

(5) 【参加者のモデルとなる役割】

このカテゴリーは、《参加者の役割モデルとなる》のサブカテゴリーから構成された。

コードとして〈発言する際には、端的に的確に伝えるよう心掛けて発言の仕方について他者のモデルとなる〉などがあった。「時間も限られているし、みんなが知らない事例だし、だからこそ端的に必要な情報をクリアに伝えるって大事だと思って心がけている」「質問は、端的に明確にというのを意識している」など、時間に制限がある中でいかに的確に情報を伝えるかを実践させていた。

(6) 【安心できる場を保障する役割】

このカテゴリーは、《事例提供者が安心できるように配慮する》《肯定的な雰囲気をつくる》などの4つのサブカテゴリーから構成された。コードとして、〈サポートのために事例提供者の隣に座るなど位置取りにも気を配る〉〈事例提供者が辛い思いをしたときはフォローする〉など、事例提供者を護ろうとしていた。また、「質問一つもポジティブにとらえられるような投げかけをしよう」や「(ネガティブな方向に)傾いたのを調整していく」のように、参加者の緊張感を和らげたり肯定的フィードバックを心掛けたりして、安心できる雰囲気の中で検討が行えるよう場全体を見渡して調整していた。

2) 【カンファレンスの有効性を高める役割】

このコアカテゴリーは、【有効なテレビカンファレンスになるように進行をリードする役割】、【多職種カンファレンスの有効性を引き出す役割】の2つのカテゴリーから構成された。

(1) 【有効なテレビカンファレンスになるように進行をリードする役割】

このカテゴリーは、《検討課題からズレないよう意識して発言する》《質問や意見を言うべきタイミングや度合いを調節する》《テレビカンファレンスならではの環境を理解したうえでスムーズな進行を担う》などの5つのサブカテゴリーから構成された。

「多分ここが引っかかっているのかなと（事例提供者に）投げかけてみて、その時は受け止めきれない人もい

る。そういう場合は、さらにそこを突っ込んでいくかどうかは、時間や場の空気との兼ね合いで決めている」と意見を言うべきタイミングとその度合いを考えていた。また「画面を通じてなので、言った言葉やその時の表情がすべてになる。なので、(自施設の参加者には)その解説をしながら進めている」と、声や表情に関する情報はモニター画面を通してしか得られないというテレビカンファレンス特有の環境も念頭に置き、必要に応じて補足説明をしながら進行していた。それらの配慮は、<テレビカンファレンスの場面だけではわからない情報を参加メンバーに補足説明して状況の理解を促す><テレビカンファレンスの特徴を踏まえて全体を見渡し、カンファレンスがスムーズに進むよう細かい配慮をする><テレビカンファレンスだからこそ必要な進行の仕方を考える>などのコードとして表された。

(2) 【多職種カンファレンスの有効性を引き出す役割】

このカテゴリーは、<多職種の力が発揮できるよう働きかける><多職種の特性に配慮する>などの3つのサブカテゴリーから構成された。<誰に発言してもらうのがよいかを判断し、適切に発言者を指名する>と、検討の流れから今どの職種の意見を求めるのが効果的かを考えていた。また、ケアとキュアの両側面から検討すべき事例を提供して、多職種ならではの意見交換を促していた。しかし、ときにはヒエラルキーを感じさせる職種もあり、そういう場合には<職種の特性に配慮する>こともしていた。このように、多職種カンファレンスだからこそ伴うメリット・デメリットを意識しながら、このカンファレンスの有効性を引き出せるよう進行していた。

3) 【現状からさらに発展させていく役割】

このコアカテゴリーは、【テレビカンファレンスの周知を図り活用を促す役割】【看護師が相談しやすいシステムを構築する役割】【今後のテレビカンファレンスのあり方を見出していく役割】【自施設の課題を果たせるよう動く役割】の4つのカテゴリーから構成された。

(1) 【テレビカンファレンスの周知を図り活用を促す役割】

このカテゴリーは、<参加していない関係者に検討内容をフィードバックする><テレビカンファレンスの周知

に努める>の2つのサブカテゴリーから構成された。コードとして<地域の医療者にテレビカンファレンスの存在を周知する>などがあり、「院外でこのテレビカンファレンスを定着させるっていうのも私の役割」と緩和ケアのリソースが充足していない地域だからこそ、在宅療養を支援する地域の医療者にも参加を呼びかけ活用を促そうとしていた。

(2) 【看護師が相談しやすいシステムを構築する役割】

このカテゴリーは、<各地域で看護師対象の支援のネットワークを拡げる><看護師が相談しやすいツールとしてテレビカンファレンスを発展させる>の2つのサブカテゴリーから構成された。「自分の施設に相談できるリソースのない看護師が相談できる場をということが最初の願いだったから、(このテレビカンファレンスを)そういうふうに拡げていきたい」と当初の目的をさらに達成していくための役割を持っていた。しかし、テレビカンファレンスの参加施設を一気に増やすことはできないため、「(このテレビカンファレンスに参加している各地域の) OCNS が基点となって、軸となって、細かいネットワークの網をはって、そこからまた発信していくというような、ちっちゃい網をまた拡げるみたいなそういう役割を OCNS がとっていかないといけない」と今のシステムをさらに発展させる構想をもっていた。そして、<各地域の基点となる OCNS はその地域の看護師を支援する>役割を自覚していた。

(3) 【今後のテレビカンファレンスのあり方を見出していく役割】

このカテゴリーは、<テレビカンファレンスの目的を現状に沿うように見直す>など2つのサブカテゴリーから構成された。テレビカンファレンス開始から3年が経過し、現状が変化する中で、「今もう一回、みんながここに何を求めるのか、このカンファレンスをどうしていきたいのかを考え直したほうがよい」と、ニーズの変化に応じてテレビカンファレンスの必要性や目的を見直すことを次の課題としていた。

(4) 【自施設の役割を果たせるよう動く役割】

このカテゴリーは、<自施設の課題を自覚しその役割を果たせるよう動く>というサブカテゴリーから構成された。「施設によって役割って違うと思う。たとえば、地域

の病院であれば、テレビカンファレンスを（相談できる場として）すぐ有効に使うことができるし、逆に都道府県がん診療連携拠点病院であれば、そういう相談を受けるんだという意識でカンファレンスに参加していると思う」と自施設の立場や求められる役割の違いを認識したうえで、その役割を果たすよう動く必要性を述べていた。

VI. 考 察

1. 多施設多職種テレビカンファレンスの特徴を踏まえた役割

多施設多職種テレビカンファレンスの特徴として、インターネットを介していることから互いにバーチャルな存在であるということがある。このような環境では、質問を受けた時の反応や発言者の意図などをモニター画面から正確に読み取ることは難しい。また、参加者は多施設に渡っているため、互に関係性ができていない。さらに、多職種での意見交換は参加者の緊張感を想像以上に強くする。OCNSは、これらの特徴を把握して全体を見渡し、発言者の声の調子や表情を読み取り、微妙な雰囲気の変化や情報の不足を察知し、適宜情報提供したり進行の工夫をしたりするなどしていた。

細田⁶⁾は、「チーム医療の条件」として多職種カンファレンスをあげ、多職種が情報を提供し合い、自由に意見を交換し合うことのできるカンファレンスは、「チーム医療」の重要な基盤であるとしている。また、井部⁷⁾は、OCNSは、課せられた役割（実践・コンサルテーション・コーディネーション・倫理調整・教育・研究）を実践するために共通の能力を発揮していると述べ、その能力の一つとして俯瞰的視点を挙げている。

緩和ケアの提供において、チーム医療は不可欠であり、多職種で自由に意見交換できる文化や雰囲気をつくることは、OCNSの重要な役割となる。今回の結果では、ポジションや職種によって意思決定が左右されかねない多職種カンファレンスならではの危険性と有効性の両側面を念頭におき、カンファレンス全体を見渡すという俯瞰的視点をもって多職種の有効性を引き出す役割を果たしていたと言える。

2. 変化促進者としての役割

テレビカンファレンスは、緩和ケアに携わる看護師が組織を超えた支援を求めていたことをきっかけに開始した。看護師同士が相談し合えるシステムは、相談できる人がいるという安心感や仕事の満足感を高めるとともに、患者に対してより質の高い看護ケアを適用することにつながる⁸⁾と言われており、その意味において、テレビカンファレンスは緩和ケアの質向上に貢献してきたと考える。

テレビカンファレンス開始時は、多くの施設で緩和ケアに携わる職種や人員の配置が充足されず、リソースの活用という意味でこのカンファレンスに対するニーズがあった。しかし、3年が経過し、緩和ケアの提供体制が徐々に整備されるに従い、テレビカンファレンスに対するニーズも変化してきている。このような現状の変化に対してOCNSは、「今もう一回、みんながここに何を求めるのか、このカンファレンスをどうしていきたいのかを考え直したほうがよい」と、テレビカンファレンスの目的やあり方を見直す必要性を指摘し、「とにもかくにも、このテレビカンファレンスを動かしているのはOCNS」「現状に甘んじるのではなく、今何が起っていて、次は何に向かっていけばいいのかを考えていく」と流動的な現状の中でも次の課題を見極め発展させていこうとしていた。

野末⁹⁾は、CNSに期待される能力として、変化促進者となる力やリーダーシップ力を挙げている。今回の対象者であるOCNSは、現状にとどまることなくテレビカンファレンスのさらなる発展と拡がり視野に入れ、テレビカンファレンスを現状やニーズに則したより良いものへと変化させようとしており、これらは多職種の中でもOCNSがリーダーシップを発揮して変化促進者としての役割を果たそうとしていると言える。

VII. 結 論

1. OCNSがテレビカンファレンスにおいて果たす役割として、【参加者の成長を促す役割】【テレビカンファレンスの有効性を高める役割】【現状からさらに発展させていく役割】があった。

2. これらの役割を果たすなかで、OCNS は俯瞰的視点をもってテレビカンファレンスを機能させ、多職種で話し合うことの有効性を引き出していた。

3. また、変化促進者としてリーダーシップを発揮し、さらなる発展と拡がりの構想をもってテレビカンファレンスをより良いものへと変化させようとしていた。

4. OCNS がこれらの役割を果たすことで、緩和ケアに不可欠の多職種カンファレンスはより充実し、結果的に緩和ケアの質向上に貢献できることが示唆された。

引用文献

- 1) 日本看護協会 <http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qolification/cns>
- 2) 厚生労働省 http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku02.pdf
- 3) 厚生労働省 http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/gan/gan_byoin.html
- 4) 中村喜美子, 村木明美, 辻川真弓他: 緩和ケア活動の実態調査～看護師の抱える問題と求める支援～. 第17回日本緩和医療学会学術大会抄録集, 362, 2012.
- 5) 野末聖香: 専門看護師の役割. 精神看護スペシャリストに必要な理論と技法 専門看護師などの高度看護実践家のための実践テキスト (宇佐美しおり・野末聖香編集), 日本看護協会出版会, 東京, 26-27, 2009.
- 6) 細田満和子: 「チーム医療」の条件. 「チーム医療」とは何か, 日本看護協会出版会, 東京, 142, 2012.
- 7) 井部俊子: 専門看護師に共通する6つの能力. 専門看護師の思考と実践 (井部俊子・大生定義監修), 医学書院, 東京, 2-3, 2015.
- 8) 野末聖香: コンサルテーション概論. リエゾン精神看護 患者ケアとナース支援のために (野末聖香編). 医歯薬出版, 東京, 209, 2004.
- 9) 前掲書 5), 31.

The Roles of Oncology Certified Nurse Specialists In Multi-disciplinary Teleconference with Palliative Care Teams of Multi-hospitals

Kimiko NAKAMURA¹⁾, Akemi MURAKI²⁾, Misuzu OICHI³⁾,
Mayumi TUJIKAWA⁴⁾, Kazuko ONISHI¹⁾

- 1) Faculty of Nursing, Suzuka University of Medical Science
- 2) Saiseikai Matsusaka General Hospital
- 3) Ise Red Cross Hospital
- 4) Graduate School of Medicine, Mie University

Key words: palliative care, multi-disciplinary teleconference, team approach, the role of oncology certified nurse specialist

略 歴

中村 喜美子 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科 准教授

学 歴：

昭和53年3月 早稲田大学 教育学部 英語英文学科 卒業
平成8年3月 三重大学 医療技術短期大学部 卒業
16年3月 三重大学大学院 医学系研究科 修士課程(看護学専攻)修了

職 歴：

平成8年4月 三重大学医学部附属病院 入職
28年3月 同 退職
28年4月 現職

資 格：

平成8年 看護師免許取得
平成18年 がん看護専門看護師資格認定

学会活動：

日本緩和医療学会 代議員 2012年度～2013年度
日本がん看護学会 代議員 2017年度～
教育・研究活動委員会委員 2010年度～2012年度

所属学会：

日本緩和医療学会
日本がん看護学会
日本看護科学学会

主な研究分野：

がん看護
緩和ケア

その他の社会活動：

看護師教育
三重県がんにおける質の高い看護師育成研修 2008年度
～2012年度 ELNEC-J コアカリキュラム看護師教育プログラム 2013年度～ 他